

巻頭言 過去と現在をつなぐ図書館

図書館長 前川 貴史



学問や芸術の世界で、長い時間をかけてたくさんの人に読み継がれてきた作品は「古典」と呼ばれます。古典には、今の私たちの社会や生き方をかたちづくる根本的な知恵や考え方が詰まっています。単なる昔の記録ではなく、今を生き、未来をつくる私たちにとって欠かせない知の源なのです。新しいものにばかり目が向きがちな現代だからこそ、時代を越えて読み継がれてきた古典の価値を、あらためて見直してみたいものです。

私自身も、通勤のときなどに『万葉集』を手に取ることがあります。およそ1300年前にまとめられた歌集ですが、今も文庫本などで気軽に読むことができます。日本を代表する古典です。そこには、天皇から庶民まで、さまざまな人々の心の声が記されています。恋に胸をときめかせ、別れに涙し、自然をたたえ、旅に不安を感じる奈良時代の人びとの姿は、現代の私たちと変わりません。古典を読むことは、時間を超えて昔の人と語り合う体験であり、人間に共通する普遍性を感じさせてくれます。

たとえば、少しユーモラスなこんな歌があります。

石磨(いはまろ)に われ物(もの)申(まを)す 夏瘦(やせ)に 良(よ)しといふ物そ 鰻(むなぎ)取り食(め)せ

『万葉集全訳注原文付(四)』(講談社文庫, p.47)から引用した、大伴家持の歌です。現代語訳は「石磨に私は申し上げたい。夏瘦によいという物ですよ。鰻をとって召し上がりなさい」となっています。

暑い夏にはウナギが元気のもとという感覚は、当時も同じだったようです。友人の石磨があまりに痩せていたので、家持が冗談まじりにからかったのでしょう。彼らは仲良しだったようで、遠慮のない内容を無駄に丁寧な言葉づかいで表現しているところに、二人の親しい関係が見て取れます。こうした歌を読むと、万葉の人々もまた、友達同士で冗談を言い合う私たちと同じ「人間」だったのだと感じられます。

古典は時間を超えて私たちに届く声であり、ときに知恵や勇気、そして新しい発想を与えてくれます。もちろん研究や資格のための勉強も大切ですが、古典との出会いはそれだけでは得られない、人生を長く支えてくれる糧になるはずです。

学びの道のりは、ときに孤独に感じられることもあるでしょう。しかし図書館は、その歩みに寄り添う場所です。どうぞ気軽に図書館を訪れ、過去と現在をつなぐ知の旅を楽しんでください。

Ryukoku University Library News



龍谷大学図書館報 来・ぶらり

CONTENTS

- 01 巻頭言
- 02 TOPICS
- 03 龍大生のお薦め本
- 04 新規収集貴重資料の紹介
- 05 京都博覧会と西本願寺
- 06 2025年度前期展観紹介

TOPICS

図書館司書課程資料コーナーの設置について

2025年4月より、深草図書館 和顔館の地下1階に「図書館司書課程資料コーナー」を開設しました。これまでこの資料コーナーは、深草キャンパス文学部教務課の事務室横に設置されていましたが、スペースが限られており、利用できる時間も教務課の開室時間に限られていました。

このたび、図書館内に移設したことで、夜間や土日など図書館の開館時間中であればいつでも資料を閲覧できるようになりました。また、ナレッジスクエアを活用すればグループでの学習も可能です。今後は、文学部や図書館司書課程の先生方による教育活動との連携や図書館で開催されるイベントへの協力も視野に入れていきます。

図書館司書を目指す皆さんが、図書館業務をより身近に感じ、学びへの意欲をさらに高めていただけることを期待しています。



龍大生のお薦め本

『浮雲』

二葉亭四迷 [作] 十川信介 [校注] 岩波書店 2004年

本作は一般に「未完の小説」と称されている。にもかかわらず、なぜ現代まで読み継がれているのだろうか。

物語は、主人公・内海文三とその従姉妹のお勢、友人の本田昇という三人を中心に展開していく。文三はお勢に恋心を抱くが、それに心を奪われるあまり職務に身が入らず、ついには解雇されてしまう。以後もお勢への報われぬ想いと、友人である本田への劣等感の狭間で、あがき続ける。

実績がないがプライドが高く、言動には自己愛と嫉妬、そして怠惰が同居している。決して立派な人物とは言いがたいが、だからこそ私は、彼の姿に強く共感した。情報が溢れる現代に生きる私たち一帯に他者の理想と比べられ、否応なく劣等感と向き合わされる私たち一帯の姿と、どこか重なるのではないだろうか。

また、本作は言文一致体の祖ともされており、自然な語り口は今なおみずみずしさを失わず、読む者に不思議な心地よさを与えてくれる。自己肯定感に揺れながらも必死に生きようとすると文三の姿は、悩みや生きづらさを感じているときに、きっと心に残るだろう。

文学部1年生 大岩 直樹



深草図書館：
和顔館2F開架文庫・新書
081/イワナ/7-1
資料番号：10405050424

瀬田図書館：
本館1F文庫
081/イワナ/3-7-1
資料番号：30400050872

『ある男』

平野啓一郎 [著] 文藝春秋 2018年

「愛にとって、過去とはなんだろう？」本書を通して著者平野啓一郎は私達にこう問いかけています。

この物語は弁護士の城戸を中心に展開され、元依頼人である里枝の亡くなった夫が全く別人の人生を生きていたことが発覚し身辺調査を依頼されるところから始まります。城戸は“ある男”の過去を辿る中で衝撃の事実を知ることになります。

人を愛するのにその人の過去は重要なことなのでしょうか。この物語ではある男の正体を追う上で人間存在の根源について考えさせられますが、最大のテーマは愛です。愛すると言うことは知りたいと言う気持ちから始まるものだと私は考えます。そのため、やはりその人の過去は知るべきことなのではないでしょうか。

ある男とは一体誰なのか、その正体を探る中で人の優しさに触れることが出来る作品だと思います。

心理学部3年生 篠川 伸



瀬田図書館：
本館B1開架
913.6/ヒケア
資料番号31905030608

『格差と貧困のないデンマーク：世界一幸福な国の人づくり』

千葉忠夫 [著] PHP研究所 2011年

今の自分の生き方は本当に自分で選んだものか。

この著書はそれを強烈に問いかけてくる。日本の学生は「勉強」の目的が曖昧な傾向にある。本来は学びたいことを学ぶために大学へ進学するはずが、大学進学自体が目的となっている人が多い。それは「大卒」が一括りにされ、一つのステータスとして扱われている社会に問題がある。「やりたいことがあるからその道に進みたい」と主張しても、大人に「大学くらいは出ておきなさい」と言われた人もいないのではない。一方、デンマークは生徒が目的を持って学び、なんとなく大学へ進学することはない。その自主性を育てる教育環境があり、社会全体も寛容である。

この著書は、普段の生活では気づけない「これっておかしくないか？」と考えるきっかけを与えてくれる。「周りがそうしているから自分もそれに従う」という生き方をしてきた人に一度読んでほしい。日本の常識は世界では通用しないかもしれない。

経済学部1年生 奥田 香穂



深草図書館：
和顔館2F開架文庫・新書
081/ヒエイ/720
資料番号：11100005810

『菜食主義者』

ハン・ガン [著] きむふな [訳] クオン 2011年

この本は、主人公であるヨンヘがある日、奇妙な「夢」を見てから肉を受けつけなくなった話から始まります。ヨンヘの夫、義兄、姉の3つの視点を通じて、ヨンヘの内面崩壊と社会的抑圧を表します。

ヨンヘは暴力的で疲れきった夢を見た後、肉を食べないと宣言し、これによって家族や社会から理解されず孤立します。その後、ヨンヘは義兄の芸術的な欲望の対象になってしまい、結局自分が植物になると言って精神が崩れていきました。

菜食という行為を通じて体に対する自己決定権、そして非正常と烙印を押す社会の暴力性を鋭く表します。ヨンヘはついに話さないことで抵抗し、「私は植物になりたいです」という言葉で人間世界の暴力から抜け出そうとする切迫した願いを表します。

私たちがどれほど簡単に他人の違いを拒否するのか、また何が正常で非正常なのかを誰が決めるのかを振り返るようになりました。この小説は語ります。沈黙も抵抗になり得ると、そして違いは決して間違いではないということ。

経営学部4年生 李 秀彬



深草図書館：8号館開架3F
929.1/アタラ-U/1
資料番号：11705038791

『人生の結論』

小池一夫 [著] 朝日新聞出版 2018年

人は、どうやって生きたら幸せになれると思いますか？

人との心地よい距離感の保ち方、しんどい仕事の乗り切り方、豊かな歳の重ね方。そんな生きていくうえで誰もがぶつかる問いに優しく答えてくれるのが小池一夫さんの『人生の結論』です。

本書は、成熟した大人になるということ 키워ドに、80年生きてきた著者がその経験から得た気づきを綴ったエッセイ集です。人間関係に疲れた時、自分らしく生きるとは何かを見失った時、この本はそっと背中を押してくれます。

「自分を大切にできる人は、人も大切にできる」

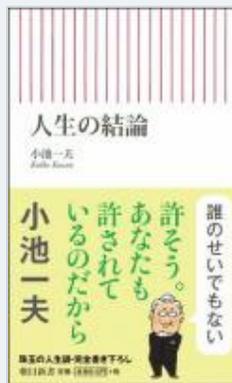
「自分の生まれ持った性質通りに生きる」

「いい言葉を使う人にはいい人生をつくれる力がある」

「自分に厳しく、人に優しく、もう一巡して自分にはもっと優しく」

これらの言葉に触れ、他人の評価ではなく自分の軸で生きることこそが幸せなのだと思われたい。この本は自分を見つめ直すきっかけを与えてくれる、そんな一冊です。

法学部4年生 北島 京香



深草図書館：
和顔館2F開架文庫・新書
081/アサヒ/682
資料番号：11800030326

『世界中から人が押し寄せる小さな村：新時代の観光の哲学』

島村菜津 [著] 光文社 2023年

あなたは、観光においてどのような体験を求めますか？

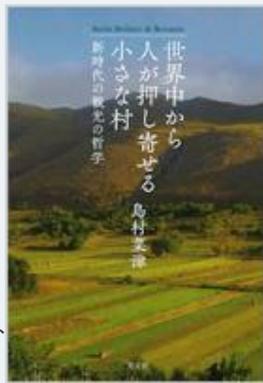
近年、世界ではマストツーリズムの発展により、様々な観光地でお土産物の画一化や観光地のテーマパーク化などが発生する。観光地の均質化が発生しています。あなたも、観光地の「そこである必要性」が薄れてきていると感じたことはないでしょうか？

本書は、そのようなマストツーリズムとは相反する、新時代の観光形態「アルベルゴ・ディフーズ」について、発祥の地、イタリア南部の小さな村を舞台に、観光のあり方を問い直す一冊となっています。

人気の土産物屋を呼び込むのではなく、「本物」に徹底的にこだわることで地域の文化を守り、地域内雇用を生む。アルベルゴ・ディフーズは、単なる観光形態の話ではなく、過疎化する地域の地域振興といった面も強く押しています。

皆さんも、自分の地域に眠っている価値とは何なのか、どのような文化を守っていく必要があるのか、本書を通して今一度考えてみませんか？

政策学部3年生 内口 世理



瀬田図書館：
本館2F開架
689.237/シナセ
資料番号：32305045785

『すばらしい新世界』

オルダス・ハクスリー [著] 黒原敏行 [訳] 光文社 2013年

西暦2540年、幾度の核戦争を経た人類は、安定至上主義の社会を築き上げていた。出生が完全に管理される世界で、大量生産される人間はセンターで教育され、5つの階級に合った生き方をコントロールされる。

遺伝子の選別、飲むだけで多幸感を得られる快楽薬ソーマの配給、幼少期からのフリーセックスの推奨、睡眠学習による「条件づけ」と呼ばれる洗脳教育など、誰もが決められた人生を幸福に生きる。「家族」は恥ずべきものとされ、老いることもなく、死への恐怖も消された文明社会に、突然未開の地「蛮人保護地区」から連れてこられた一人の青年が、文明社会で騒動を巻き起こす。

「家族」を持ち、神を信じ、死を恐れる彼は、徹底管理された「幸せ」に満ちた文明社会に何を思うのか。「自由」とは、「人間らしさ」とは一体何なのか。発表以来、多くの読者に議論され続けてきた、ディストピア小説の名作。

国際学部3年生 松下 日咲



深草図書館：
和顔館2F開架文庫・新書
081/コウフ/1Aオ-2-1
資料番号：11300037937

瀬田図書館：本館1F文庫
081/コウフ/Aオ-2-1
資料番号：31305038650

『人間椅子』

江戸川乱歩 [著] 角川書店 2008年

「私はお化けのような顔をした、その上、ごく貧乏な、一職人に過ぎない私の現実を忘れて、身の程知らぬ甘美な、贅沢な、様々様々の「夢」にあこがれていたのでございます。」
江戸川乱歩 『人間椅子』

貧しい椅子職人は、世にも醜い容貌のせいで、常に孤独だった。惨めな日々の中で思い詰めた男は、納品前の大きな肘掛椅子の中に身を潜める。その椅子は、若く美しい夫人の住む立派な屋敷に運び込まれて...

椅子を介して夫人への想いを募らせる男の偏愛を著した作品に始まり、江戸川乱歩の傑作ともいえる刺激的な作品が収録された一冊となっています。緻密なトリックと奇抜な設定が特徴の江戸川乱歩。不可思議な人間関係や風変わりな登場人物たちによって織りなされる各作品は、きつと、読者を夢中にさせてくれます。

生誕130年を迎える今年、推理小説の礎を築いた、江戸川乱歩を近くに感じてほしいです。

社会学部4年生 篠津 一心



瀬田図書館：
本館B1開架
913.6/エラエ/1
資料番号：31700014682

『羊と鋼の森』

宮下奈都 [著] 文藝春秋 2015年

皆さんは調律師という言葉を知ったことはありませんか？調律師とはピアノなどの楽器の音律を調整する仕事のことで主に音程を正確に合わせたり、音色を調整したりすることを指します。

この本の主人公である外村はある日、担任の先生に接客の案内をするように頼まれます。その接客が調律師の板鳥という人物でした。外村は板鳥と出会い、初めて調律師の仕事を経験し、だんだんと調律師という仕事にあこがれを抱いていきます。そこから外村は調律師を目指すため、たくさん調律についての勉強をしていき、板鳥のいる職場で一緒に働くようになります。この本では外村は板鳥との出会いがきっかけで調律師になりたいという夢ができ、人として成長していく物語です。

私はこの本を読んで板鳥との出会いで、調律師という仕事にあこがれ、その夢に向かって全力で努力する外村がとても印象的でした。みなさんもこの機会にぜひ読んでみてください。

先端理工学部4年生 浅田 泰斗



深草図書館：
和顔館2F開架 913.6/ミナヒ
資料番号：11905018882

瀬田図書館：
本館地下1階 913.6/ミナヒ
資料番号：31605033161

『三日間の幸福』

三秋縋 [著] KADOKAWA 2013年

あなたは今までにどのような人生を歩んできただろうか。それは、恐らく長いようで短い道りであったらう。その道中で、生きることの辛さを感じたことはなかったらうか。ある人はこれまでの人生を悔い、またある人はこれからの人生に不安を感じる。もし、これからの人生に望みがなくなった時、自分の人生を売却できるとしたら、あなたの歩みはずだった人生は一体いくらになるだろうか。

平均的な生涯年収は3億円であるという話ほどどこかで聞いたことがあるだろう。多くの人はこの話を元に自分の人生の価値について考えるだろう。しかし、いざ自分の人生の価値を売却しようとしたとき、想像より低い価格だった場合、あなたはどうか考えるだろうか。不幸にも1年につき1万円の値段がつけられた時、自分の人生につけられた値段についてどう思うだろうか。あきらめず人生を歩み続けるだろうか。それとも、人生を売ってしまうだろうか。

農学部3年生 佐藤 萌空



深草図書館：
和顔館2F開架学生選書
081/2021/53
資料番号：12100021981

『人質の朗読会』

小川洋子 [著] 中央公論新社 2011年

日本ではない、どこか遠い国で起きたテロ事件に巻き込まれてしまった八人の人質たち。人質事件のニュースを聞いた人々が、事件が起きていることさえ忘れかけるほどの長い時間が経っていく。その中で、人質たちはひっそり、思い出の朗読会を開いていた。一人が丁寧に書きだした思い出を語る間、ほかの七人はそっと耳を傾けている。彼らの何気ない日常に潜んだ不思議な体験の朗読会は、犯人にだって邪魔することはできなかった。

本書は、八人の人質たちそれぞれの思い出が語られた短編集です。話し手の心理描写が細かく、物語の中に入り込みやすいため、普段小説に馴染みがない人でも読みやすい本です。また、人質たちのような不思議な体験はしてなくても、不思議と共感できる部分が多いのも特徴です。読後は静かに安らぎが貴方の身を包むでしょう。ぜひ手に取ってみてください。

短期大学部2年生 櫻井 葵



瀬田図書館：
本館B1開架
913.6/オウヒ
資料番号：31105041422

新規収集貴重資料の紹介

大宮図書館には、国宝『類聚古集(るいじゅうこしゅう)』、国指定重要文化財『念仏式(ねんぶつしき)』、『李柏尺牘稿(りはくせきとくこう)』をはじめ、貴重資料が数多く所蔵されています。貴重資料は、学術研究や授業などに活用されている他、毎年秋に開催される大宮図書館特別展観で、その年のテーマに関係したものを選んで、展示公開しています。また、貴重資料のカテゴリーをより充実したものにするために収集を続けています。

今回新たに丹緑本(たんりょくぼん)『保元・平治物語(ほげん・へいじものがたり)』を購入・収蔵しました。丹緑本とは、江戸時代の寛永から万治頃(1624~1661)にかけて刊行された、墨刷の挿絵に丹(たん)・緑青(ろくしょう)・黄の彩色を施した版本です。後の多色刷り版本へとつながる資料として、出版史上その価値が評価されています。内容は、平安時代末期に起こった保元の乱、平治の乱を題材にした軍記物語です。同じ軍記物語である『平家物語(へいけものがたり)』や『承久記(じょうきゅうき)』と合わせて『四部合戦状(しぶかつせんじょう)』とも呼ばれています。

保元元年(1156)、崇徳上皇(すとくじょうこう)と後白河天皇(ごしらかわてんのう)の皇位継承問題に摂関家の藤原頼長(ふじわらのよりなが)と藤原忠通(ふじわらのただみち)の対立が加わり、両者が平氏や源氏の武士団を用いて交戦したことから、保元の乱が起こります。後白河天皇や藤原忠通、平清盛(たいらのきよもり)、源義朝(みなもとのよしとも)らが勝利しますが、やがて後白河上皇の近臣である信西(しんぜい)と藤原信頼(ふじわらののぶより)の対立をきっかけに、平治元年(1159)に平治の乱が起こります。この乱により信西に味方した平清盛は、信頼方の源義朝に勝利し、平氏は隆盛を極めていき、源氏は衰えていきます。そして、約20年後の源頼朝(みなもとのよりとも)による平氏打倒の挙兵、平氏の滅亡へと繋がっていきます。

栄華を極めた平氏が、頼朝の挙兵により衰亡していく過程を物語った『平家物語』と同じように、『保元・平治物語』でも、保元の乱で勝利した側が対立を迎え、平治の乱により再び勝者と敗者に分かれる過程を物語っています。また、『平家物語』と同じように琵琶法師によって語られていたことが知られています。

龍谷大学図書館は、軍記物語では、覚一本(かくいちぼん)『平家物語』の最善本を所蔵しており、岩波書店の『日本古典文学大系』の底本にもなっています。その他にも丹緑本『義経記』(源義経の生涯とその主従を中心に描いた軍記物語)なども所蔵しており、丹緑本『保元・平治物語』が収蔵されたことで、軍記物語分野の資料がより充実することが期待されています。



『保元物語』部分
(右頁挿絵は、源義朝に攻められ、崇徳院の御所白河殿(しらかわどの)が落ちる場面)



『平治物語』部分
(右頁挿絵は、待賢門(たいけんもん)に陣取った源義朝と平重盛(たいらしげもり)との戦いの場面)

京都博覧会と西本願寺ー日本初の博覧会の開催ー

<深草ミユウ館紹介>

日本ではこれまでも、「大阪万博」（1970年）や「愛・地球博」（2005年）、「大阪・関西万博」（2025年）などの博覧会が開催されてきましたが、わが国における博覧会の起源は、1871年の「京都博覧会」と言われています。そして、この京都博覧会は、本学と関係の深い西本願寺で開催されていたのです。

日本初の博覧会は西本願寺で開催

「博覧会」について、辞書・事典のデータベースであるJapanKnowledge Libには、「日本における近代的な博覧会の起源となったのは、1871年に西本願寺を会場に開催された京都物産会である。」（『日本大百科全書』）と記述されています。さらに『本願寺年表』（本願寺史料研究所編）にも、明治4年（1871）10月10日の箇所に「本山書院で日本最初の博覧会を開催」とあります。

明治4年といえば、維新直後で京都の町は奠都で、政治、経済、文化などに大きな打撃を受けていた時期でした。沈滞ムードが漂う当時の京都の活性化の主要な事業として、京都博覧会が開催（会期：10月10日～11月11日）されたのです。京都の町は、幕末の蛤御門の変などの戦火で、東本願寺をはじめ中心部の多くの寺院や町屋などが焼失しました。かろうじて類焼を免れた西本願寺は、町中の至便なところに位置して広い書院を有しており、開催会場として最適と判断されたのでしょう。

京都博覧会の成り立ちと実態

博覧会の主催は、当時の京都の有力な商人である三井八郎右衛門（孝福）、小野善助（包賢）、熊谷久右衛門（直孝）の三氏で、初代知事・長谷信篤がこれに賛同し、政府の木戸孝允とも昵懇であった京都府参事・榎村正直も開催を補佐していたとされています。長谷は、長州藩出身の広沢平助・松田道之を起用し、榎村も長州藩出身でした。西本願寺では、木戸孝允と親交をもっていた周防出身の島地黙雷・大洲鉄然らが教団改革に取り組み、第20代宗主広如も榎村らと親交をもっていたため、博覧会の会場となったと考えられます。

京都博覧会の出陳物は、336件であり、皇国部（166件）、西洋部（39件）、支那部（131件）の3部に分けられていました。西本願寺からは、皇国部に「懐紙巻：巻首一枚 後鳥羽天皇 御製以下十枚共名臣詠草」、「多賀城古瓦」、支那部に「陳学三老人圖」、「無款水墨漁樵問答圖」が出陳されています。また、出陳物と並んで西本願寺の書院を飾る襖絵や欄間彫刻などが紹介されています。この明治4年の京都博覧会が嚆矢となり、明治5年に第一回京都博覧会が西本願寺、知恩院、建仁寺で開催され、明治6年からは禁裏（京都御所）が会場となりました。その後、京都博覧会は名称を変えて、昭和3年まで続けられることとなるのです。

西本願寺に開設されていた常設の「博覧館」ー「龍谷ミュージアム」の淵源ー

西本願寺も会場となった明治5年の第一回京都博覧会（会期：3月10日～5月30日）を経て、西本願寺の書院に常設の「博覧館」が開設されました。この博覧館は、6月21日に開館し、11月27日まで1と6の日に開場（朝8時～夕4時）され、明治7年まで3力年間開設されました。この常設の博覧館の閉館後も西本願寺では、明治8年4月15日に「第一回真宗宝物展覧会を開く」（『本願寺年表』）とあり、それを引き継ぐ取り組みが展開されていました。

このような事実から勘案すると、明治5年から明治7年にかけて開設されていた京都博覧会の常設の「博覧館」、明治8年に西本願寺が開催された真宗宝物展覧会（本願寺集覧会）は、まさに現在の「龍谷ミュージアム」の淵源とも捉えることができ、今日の龍谷大学の活動を考える上でも意義深いものといえるでしょう。

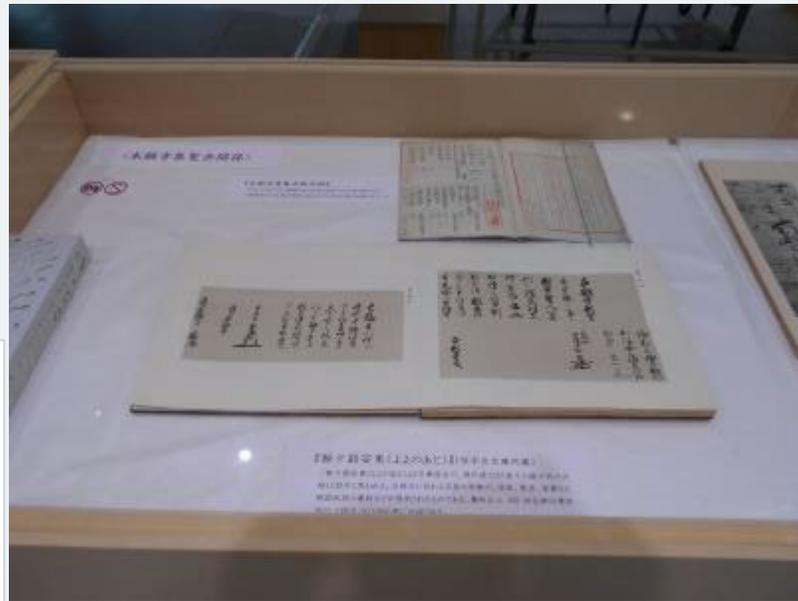
（本文は、「京都博覧会と西本願寺ー日本における博覧会の起源ー」『龍谷大学校友会報』<88号3頁、2019>をもとに再構成したものです）

京都博覧会と西本願寺―日本初の博覧会の開催―

<深草ミニ展観紹介>



※深草ミニ展観風景①



※深草ミニ展観風景②



※深草ミニ展観ポスター

<参考資料>

「博覧会―近代技術の展示場―」

国立国会図書館、2010-2011.

「京都の博覧会」(都市史29)

京都市・京都市歴史資料館、2003.

「京都・近代化の軌跡 第4回

知識と情報を商売の糧に～京都博覧会の開催」

京都経済同友会、2012.

2025年度前期展観について ～こんな展示をやっていました～

図書館では、深草・大宮・瀬田の各館で館内展観を行っています。テーマは季節や出来事、年中行事に加え、学習や研究に役立つ内容など、幅広く取り上げています。展観を通して蔵書をさまざまな切り口で紹介することで、利用者の皆さんが新たな発見や関心を持つ機会になることを目的としています。

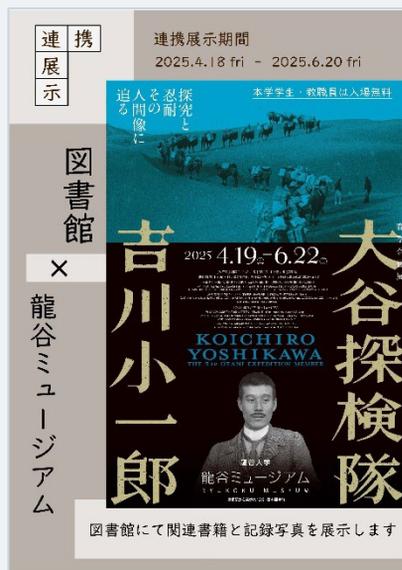
今回は、4月～6月に開催した<龍谷ミュージアムとの連携展示「大谷探検隊吉川小一郎～探究と忍耐 その人間像に迫る～」>、6月～7月に開催した<教学企画部ライティングサポートセンターとの企画展示「万国博覧会とは」>をご紹介します。

・図書館×ミュージアム連携展示

「大谷探検隊吉川小一郎～探究と忍耐 その人間像に迫る～」

明治から大正期に活躍した探検家、吉川小一郎は「大谷探検隊」第3次隊の一員として1911年に上海に至り、西安、蘭州を経て、トルファン、庫車（クチャ）などの調査を1914年まで続けました。吉川の調査は、多数の経典、植物標本、伏羲女媧図などの資料を日本にもたらし、高い評価を得ています。そんな吉川の調査に対する探究と忍耐の姿勢を知る手がかりとして、関連図書の展示、中央アジアを調査した隊員の肖像写真ならびに、吉川自身が撮影した調査の記録写真を紹介する連携展示を開催しました。

こちらの展示は、4月18日（金）～6月20日（金）の期間に開催しました。



※図書館×ミュージアム連携展示ポスター



※図書館×ライティングサポートセンター連携展示「万国博覧会とは」ポスター

・図書館×ライティングサポートセンター連携展示 「万国博覧会とは」

ライティングサポートセンターのチューター（本学大学院生）による選書展示「万国博覧会とは？」を開催しました。この展示は、2025年4月13日に開幕した日本国際博覧会（大阪・関西万博）にちなんで企画されたもので、「万博」とはそもそもどのようなものなのか、その意義や歴史を改めて見つめ直すことを目的として実施されました。

この展示では、万博の起源や過去の開催事例、各国の文化交流、技術革新の紹介など、さまざまな角度から万博を捉えた書籍を紹介しました。選書は、テーマに沿って調査・検討を重ねた上で行われ、大学院生ならではの視点で光る内容となっていました。

こちらの展示は、6月2日（月）～7月29日（火）の期間に開催しました。